

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：34503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720388

研究課題名(和文) 中世土器生産体制の考古学・歴史学的研究

研究課題名(英文) Archaeological and Historical Study on Earthenware Production in Medieval Japan

研究代表者

中井 淳史 (NAKAI, Atsushi)

大手前大学・史学研究所・研究員

研究者番号：80411768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中世土師器を主たる研究対象とし、これまで十分に明らかにされてこなかった中世土器生産体制について、考古学・文献史学の両側面から検討し、土器生産工人の動向や組織のあり方、製作技術の継承や模倣という観点からみた製品の展開や地域間交流の実相を明らかにすることを目的とする。戦国時代末期に作成された『長宗我部地検帳』の検討から、郡単位で土器工人が存在し、神社に従属しながら半農半工の生活をおくっていたことなどが明らかになった。一方、考古資料としては兵庫県地域を主にとりあげ、これまで様相が明らかではなかった但馬地域における中世土器様相を整理検討することができた。

研究成果の概要(英文)：It has been considered that medieval Haji ware is useful object for the chronological study in Japanese medieval archaeology. In spite of rich accumulation of chronological knowledge, the aspect of Haji ware production is not always elucidated. The present study aims to create new archaeological methods for identifying Haji ware makers from their products and examine the medieval Haji ware production system. I focused on two problems as follows; (1) historical survey on the lives of Haji ware makers in late medieval Tosa, (2) archaeological survey on aspects of Haji ware in late medieval Tajima. At first, I investigated "Chosokabe Chikencho", which is the land surveying records, and extracted all land records and Honogi (place-name) concerned Haji ware production. As a result, Haji ware makers lived in each provinces and most of them had own farmlands as farmers. Next, I mainly investigated Haji ware excavated from Tajima. I got some prospects about aspect of Haji ware in this area.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学 考古学

キーワード：中世 土師器 生産体制

1. 研究開始当初の背景

中世土器研究はこの20～30年の調査件数の増加を背景に、著しく進展した分野のひとつである。昨今の研究のなかで特に隆盛なのは、土器・陶磁器の動きから物流構造を復元する流通論研究である。かつては大陸からもたらされた陶磁器をもとに議論が組み立てられ、東アジア海域の交流が論じられてきた。近年はさらに細分化され、列島内の地域間交流の実相を明らかにする動きもみられるようになったが、そのなかであらたに注目されてきたのが、土師器や瓦器、瓦質土器のような、村落単位での小規模生産がなされていたと漠然と考えられ、それゆえにあまり広域に流通しないと考えられてきた遺物群、いわゆる在地土器の動向であった。本来的に「動かない」と思われる土器が遠隔地で出土する事例が各地で報告された結果、むしろこのような土器に注目することで、地域間交流の実相をより詳細に検討できるのではないかと考えられるようになったのである。

これら在地土器は従来、使用期間の短さから遺跡や遺構の年代を知るための適切な材料としての側面が注目され、各地で編年研究がすすめられ、その過程で地域色の把握もなされてきた。このような基礎的研究の成果が先述の流通論研究に寄与しているわけであるが、これらはいくまでも消費の実態を示すものであり、そもそも在地土器がどのように生産されていたのかという問題はいまだ解決されていない。中世六古窯に代表される中世陶器は、窯跡の調査事例が蓄積され、分布や構造、焼成技術の検討から生産に関するさまざまな側面が明らかになっている。在地土器は一方、低火度焼成で事足りたためにおそらくは一時的・簡易的な生産施設で焼かれたと推測される。そのため生産遺構がほとんどのこらず、陶器と同じ方法による検討が著しく困難であることが、問題の背景として考えられよう。文献史学においても、これらが文献史学の主要な論点としてとりあげられることはほぼ皆無であり、わずかに商業史上の一例として南都興福寺の土器座が紹介される程度(脇田晴子『日本中世商業史の研究』、1969など)にすぎなかった。申請者はかつて土器の器名考証研究をおこなったが(「土器の名前」『日本史研究』483、2002)、その過程で土器そのものやその生産者にかかわる史料は決して皆無ではないという見通しを得た。土器生産体制の解明という、考古学的な問題意識にたって文献史料を整理・検討する必要性を認識するに至った。

生産遺構の少なさという資料的制約は、今後の調査件数の増加を待ったとしても完全に解決されることは難しい。したがって、生産遺跡のデータに拠らないあらたな方法論

を模索する必要がある。申請者はこれまで中世土師器の全国的様相や機能・用途などの諸問題、とくに中世京都の土師器製作技術が各地に波及する現象を研究してきた。その過程で、この現象が単なる技術の受け渡しではなく、受け入れる側での創意工夫や解釈が多分に含まれたものであることに気づいた。すなわち、現代的な意味での技術の移転や模倣といった類ではなく、生産工人が京都の土師器を認識し、そこから取り入れるべき要素を各自の解釈にもとづいて取捨選択し、受け入れるという、一種の創造的行為であったと考えられるのである。このようにとらえると、この分析は生産工人の差異や識別の問題にも踏み込み得る余地をじゅうぶん有すると期待される。これまで検討してきた京都の技術移転の研究を深化させ、技術の受容や保持、変容といった状況を各地の資料の変遷から読み取り、これを生産工人の能動的活動として把握することで、より生産体制に引きつけた議論の構築を着想した。

以上の二点、すなわち歴史学(文献史学)的および考古学的検討から、中世土師器生産の様態を多角的に考察する構想を得た。

2. 研究の目的

本研究は、生産遺跡に関する情報がきわめて乏しい中世の在地土器生産、とりわけ中世土師器を対象として、考古資料および文献史料の両面から基礎資料を集成し、検討を加える。具体的には、(1)中世後期の検地帳など在地の文献史料を素材として、土師器生産集団に関する情報を抽出・整理するという歴史学(文献史学)的方法、そして(2)土器の模倣製作という現象に着目し、土器の技術様式論的分析から地域間交流の状況や受容技術の保持・変容過程を検討するという考古学的方法、というふたつの方法を用いたうえで、それぞれ得られた成果を比較対照する。そして、地方にあって土師器生産集団がどのような組織構成をもち、どのような規模で分布・展開し、どの程度の広がりて製品を供給していたのかといった生産体制に関する基礎的な問題を解明し、中世窯業のひとつとしての中世土師器生産のあり方を素描することを目的とする。

3. 研究の方法

文献史料に関する資料的制約から、中世後期、すなわち15～16世紀を主たる検討対象と設定したが、考古資料については近年の調査によって資料の蓄積も増えているので、適宜中世前期もとりあげた。

土師器生産集団を考察する文献史学的研究としては、慶長期に土佐の戦国大名長宗我部氏によって作成された『長宗我部地検帳』に注目した。豊臣政権の政策として著名な太閤検地の一環として、長宗我部氏の領国であ

った土佐一国を対象としておこなわれたものである。一国規模の検地結果がのこっている点もさることながら、一地一作人の原則という太閤検地の基本原理とは異なり、中世以来の複雑な土地所有関係をそのまま記載している点できわめて特徴的な史料である。この史料を検討することによって、一国規模でどれだけの土師器生産集団がいたのか、また分布の状況を知ることができ、加えて生産者の田地所有状況に関する情報を集成すれば、かれらが営んでいた生業の詳細についても知ることができよう。ここから知り得るのはあくまでも16世紀末という中世でも終末段階の状況であり、ただちに中世全体に敷衍するには問題があるが、たとえそうであっても、従来ほとんど検討されてこなかった土師器生産集団像の一端を示すことは非常に価値のある検討と考へた。具体的には、『長宗我部地検帳』にみえる土師器生産集団（土器、土器屋といった工人を指すと思われるもの）の記録、および土師器生産に関連すると思われるホノギ（小字）地名を抽出し（これは、検地以前の土師器生産の痕跡を示し得る史料である）、田地の位置や規模、等級、所有関係などを集成し、データベース化をおこなった。田地については所在を示すホノギ（小字）が明記されており、現在も地域によって同じホノギが確認できる例もあるが、すべての事例について田地の位置まで特定することは困難かつ膨大な作業が予想されたため、田地が所在する郷村単位でまとめるにとどめ、地図上におおよその展開状況を記録した。

考古学的検討としては、文献史料の検討に対応させるかたちで、土佐地域の中世後期の土師器の出土状況について、資料の収集や検討をすすめた。土師器は地域色の強い土器と一般的に考えられており、地域色の相違が漠然と生産集団の相違と考えられてきたが、その厳密な検討は、方法論の面においても、研究史のなかできちんとした課題として受け止められてこなかったきらいがある。実際問題として多くの困難を伴うことは確かであるが、生産集団の判別の手がかりとして、本研究では、京都で生産された土師器の形態や技術を模倣する現象に注目した。京都の土師器技術の模倣とは、京都（の生産者集団）と地方との間の直接的な技術伝習、すなわち人と人のつながりや交流といった方法によって成立したものではなく、モノである製品を介し、そこから視覚的に判断できる要素を模倣し、地方独自の技術体系のなかで復元してゆくという、非常に曖昧で、かつ個人の技能に準拠しやすいあり方であったというのが、これまでの申請者の研究を通じて得た仮説である。したがって、模倣の程度や差異を厳密にみてゆくことによって、生産集団の相違を抽出できるのではないかと考へた。具体的なケーススタディとして、中世後期の但馬地域をモデルとしてとりあげ、戦国大名山名氏の城下町と考えられる宮内堀脇遺跡など、近

年蓄積されつつある中世後期の土師器資料を中心に収集した。当該地域は宮内堀脇遺跡のように遺物のおおよその変遷が把握されている例もあるものの、地域全体としての土器様相についてはきちんとした検討はおこなわれていないため、まずは但馬地域の土器様相を明らかにしつつ、京都産土師器製作技術の模倣や受容という観点から土師器資料をとらえなおし、技術の保持や変容に土師器生産集団の差異がどこまで現れるかを検討した。

4. 研究成果

研究成果は、大きく以下の二点に集約できる。

(1) 『長宗我部地検帳』にみる中世末期土佐国における土師器生産

第一の検討課題については、土佐一国にまたがる大部な史料をすべて検討し、可能な範囲で土師器生産集団に関する史料の抽出・集成をおこなうことができた。その結果、土佐においては、郡ごとに土師器生産集団が存在し、生産活動を展開していた状況を確認することができた（図参照）。かれらの製品の供給圏も郡程度の規模であったと考えられる。かれらの大半は農村に居住していたが、わずかながら城下町に居住していたと考えられる生産者もいたことが明らかとなった。土師器生産集団はそれぞれ屋敷地と田地を所有しており、田地は自ら耕作する一方、周辺の農民に請作させていた。すなわち、半農半工というのが中世末期の土佐における一般的な土師器生産集団像であったということができる。

一方、ホノギなどの検討から、土師器生産集団は地域の神社と密接な関係を有する傾向がつかったことが明らかになった。神社から田地を給付される対価として、神事などに必要な土師器をおさめていたものと推測される。一方で、同時に土器「屋」を名乗り、城下町に居住する生産者が確認できたが、これは神社に従属し、半農半工で製作するあり方から、土師器を商品として取り扱い、専業として土師器生産をおこなっていく萌芽と評価できそうである。

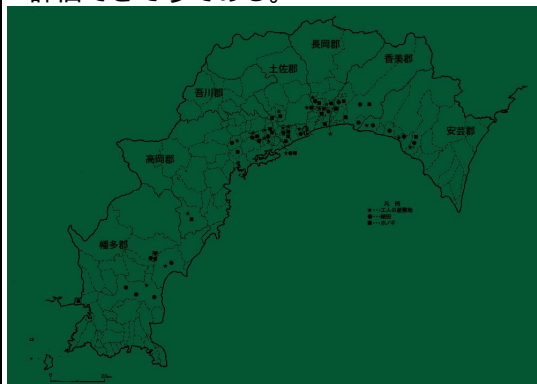


図. 土佐国における土師器工人の分布

(2) 中世但馬地域の土器様相

文献史的検討と対照させる意図から、中

世後期の土佐地域における土師器の情報収集や検討をすすめたが、この点については近年、資料の蓄積がすすみつつあるものの、土佐全体をみわたすと資料の偏りがみられたこと、また『長宗我部地検帳』で判明した生産地域とうまく照合できるような事例に乏しかったことから、結果的には今後の課題とせざるを得なかった。

但馬地域については、16世紀後半の遺物が大量に出土した、戦国大名山名氏の城下町と推定される宮内堀脇遺跡を中心に、14世紀後半ごろと考えられる場市遺跡、さらに先行する寺地窯跡などの出土土師器を検討し、14世紀から16世紀に至る土器様相の変遷を検討した。細部についてはなお検討の余地はあるものの、中世後期の但馬地域の土器様相の概略を明らかにできたと考える。この地域は14世紀代にロク口成形による土師器生産から、京都と同一の技術基盤である手づくね成形による土師器生産へと転化していくなかで、京都では13世紀ごろには顕在化する赤色・白色の二種類の土師器という要素のみが導入された。その後、京都の影響が再びこの地域に波及したようで、16世紀後半までには宮内堀脇遺跡例に代表されるような、京都の技術や形態をよく模倣した京都系土師器生産が導入されていったと考えられる。この遺跡は、大名居館の膝下という特殊性を考慮する必要はあるが、同時期のほかの遺跡では、やや粗雑なつくりの京都系土師器が出土していることが確認でき、技術模倣の実現度という点で明確な技量差のある複数集団がこの地域に存在し、それぞれの製品供給圏（先）を持っていたことが推測された。

(3) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究の意義は、これまでじゅうぶんな検討が加えられてこなかった中世の土師器生産体制について、生産集団の分布や動向、生産のあり方という点でひとつのモデルを示すことができた点にある。従来、土器・陶器の生産体制に関する研究は、生産遺跡を素材とするのが通例であった。生産遺跡の発見例にきわめて乏しい中世土師器は、その点において大きな限界を抱えていたわけであるが、本研究では文献史料を博捜することによって、生産の実態を考える素材を得ることができ、文献史的な検討から得た土師器生産体制のモデルを今後の作業仮説として提出できた。今後も生産遺跡の大量発見は期待できないであろう中世土器研究にとって、この成果はブレイクスルーとしての価値を有すると考える。

第二の点としては、これまで研究の遅れていた中世の但馬地域について、中世後期という限られた時期ではあるが、土師器様相の変遷を整理できた点があげられよう。近年の資料の増加によって、全国の中世土器様相の概要こそ明らかになってきているとはいえ、細かくみてゆけばまだ詳細な変遷が不明瞭な

地域は多い。但馬地域もその一つであり、地域の土器編年研究を深化させてゆくひとつのたたき台として、本研究の成果は重要な意味を有すると考える。

近年の中世土器・陶磁器研究は、広域的に動く土器や動かぬ土器を駆使した流通論的研究に偏しつつあり、個々の土器・陶磁器をとりあげた研究はやや低調な傾向がみられるが、最近では東播磨地域で生産されたいわゆる東播系須恵器の再検討がすすめられるなど、これまでの研究によってある程度「わかった」と考えられてきた資料の見直しが始まりつつある。このような研究動向に照らし合わせるならば、本研究は編年研究の土台として取り扱われてきた土師器の、生産の問題を見直す試みと位置づけることができ、資料の見直しを促す意味で、一定のインパクトがあるものと考えられる。

(4) 今後の展望と指針

研究を深化させていくうえで一つのモデルを提示することができたとはいえ、なお課題もこっている。ひとつは、中世末期の土佐国の状況から導きだしたモデルが、どこまで普遍性を持ち得るかの検証である。15世紀ごろには奈良で土器座が成立し、京都では座という組織形態をとっていたかは不明ではあるが、複数の生産集団が存在していたことが知られている。一方で、断片的な史料によれば、豊後地域などでも神社に付属した土器生産集団の存在が指摘されている。このような他地域の事例を今後も収集・比較検討して、今回提示したモデルの検証や、さらに多様な生産のあり方があったのかどうか、すなわち全国的な視野にたった生産体制論をすすめていくことが重要である。

もうひとつ重要な課題は、本研究で示したモデルを、考古資料と対照させることによって検証する作業だ。本研究では、その吟味がほとんどできず、今後の課題となってしまった。これは土佐地域でじゅうぶんな考古資料が得られなかったという資料的な制約もあるが（とはいえ、『長宗我部地検帳』の史料価値を鑑みれば、本史料を用いて生産集団に関する情報を得ることは、たとえ考古資料との対比が困難であったにせよ、必要不可欠な課題であったと考えている）、発掘調査の進展で資料が蓄積されている現在、さらに資料の収集を続けていく必要がある。

土器の模倣生産に焦点を当てるのが、土師器生産集団の把握にもつながり得るといえる見通しが得られた点は重要な成果といえるが、この点についても、本研究でなし得た検討は、地域的にも、量的にも決してじゅうぶんなものであったとはいえない。但馬地域に関していえば、中世前期や、宮内堀脇遺跡につづく時期について検討を加えることができなかった。中世全体へ視野をひろげ、まずは但馬地域の土器様相を明らかにすることを次の課題としたい。さらに、京都系土師器の生産は但馬にかぎらず、日本の広い範

困で確認できる現象である。これまでは京都との文化的影響という観点から評価されてきた事象であるが、生産集団の抽出という、本研究で示したあたらしい観点にたつて再評価をすることも、土師器生産研究を深化させるうえで重要な階梯になると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

中井淳史「中世 近畿」『考古学ジャーナル』656、査読無、2014、110-112

中井淳史「中世の研究動向」『日本考古学年報』64、査読無、2013、52-59

中井淳史「新世紀の土器・陶磁器研究」『中近世土器の基礎研究』24、査読無、2012、1-5

森島康雄・中井淳史・佐藤亜聖「山城・木津川河床遺跡採集遺物整理報告」『第31回中世土器研究会 瀬戸内の河海からみえる中世物流の世界』、査読無、2012、143-166

大河内栄子・橋本久和・中井淳史・白石純・鈴木康之・大川沙織・島田豊彰・福田正継・松本彩・佐藤亜聖・佐伯昌俊・續伸一郎・藤本史子「備前・吉井川河床遺跡採集遺物整理報告」『第31回中世土器研究会 瀬戸内の河海からみえる中世物流の世界』、査読無、2012、123-142

中井淳史「(学界展望)近畿」『中世都市研究』16、査読無、2011、245-262

[学会発表](計2件)

中井淳史「「動かぬ土器」の流通論 - 中世土師器を題材に - 」備前歴史フォーラム2013、2014.3.16、岡山

中井淳史「中世土師器の機能と生産体制」就実大学古代史地域フェスタ III、2013.11.30、岡山

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

中井 淳史 (NAKAI ATSUSHI)

大手前大学・史学研究所・研究員

研究者番号：80411768

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし